

7. 井戸のたわごと

酒井軍治郎著
北方新社（1973）
菊判 p.229
定価 1,500 円



目次

はじめに

うろうろする新米技師、新米技師大いに張り切る、掘り抜き井戸屋さん、空振りに終わった調査報告、薄黄色になった古い白いズボン、よく遊びよく学ぶ、三文俳人“酒井研水”、井戸の俳句、占いの杖、地震屋さん、コーリャン畑の野井戸、木製のポンプ、満州井戸、初めての著書、変わり種の役人、関釜航路のかつぎ屋、海面から真水を汲む、慶州に伝説の井戸を探る、人影が鷺の群れのように、禁書の煙、どこにいるのか盧君、引き揚げ船の密航者、南伊予の山村に住む、妙楽寺方丈記（1）（2）、高等学校の教師になる、トテ馬車に乗って、蝙蝠教室、赤煉瓦の校舎の連想、日本地下水学会の誕生、納屋という名前の子供部屋、上水道竣工式への招待、地下水資源が減っていく、術語の話、開拓地の用水、地盤沈下の心配、関東ローム台地の井戸の連想、“百万人の地下水学”上梓の夢、病床雑記（1）（2）、グダリの湧き壺、泉源統合のすすめ、温泉開発のパイオニア、岩魚の味、珍しい間歇温泉、八甲田山に温泉研究所を、約束手形、けしからん温泉掘さくの申請、応用地質学時代がきている、さく井業界の友だち、テーブル・スピーチ、定年退官の前後、PR時代、水の湧くまで井戸を掘れ

紹介コメント

著者は、戦前には朝鮮総督府農商局に勤務し、戦後は弘前大学で教鞭をとり、地下水の研究に従事され、「地下水調査法」「地下水学」「応用地下水学」「地下水の水理解析法」などの著者がある地下水学の先達である。この本は、陸奥新報社からの依頼で新聞紙上に連載したものを1冊にまとめて上梓されたもので、副題には「地下水と共に四十余年」と記されているように、著者の45年余りになる地下水研究にまつわるさまざまな思い出話が記されている。はじめにでは、学生時代にすでに地下水学を研究しようと志し、特に誰かの指導を受けたわけでもなく、大学で講義も聞いたことが無く、独学でその道を極め、目標として「日本に地下水学会をつくること」「地下水学の学問体系をつくること」「国際地下水学会を日本で開催すること」を掲げて、それをすべて実現するために努力され実際に実現することができたと記されている。日本の地下水学にとって大きな役割をされたことが知れる。そんな偉大な業績を残された酒井教授の履歴書的な随筆で、どこから読まれてもよい構成となっているので、気にいたところから読んで頂くことで何か得るものがあるのではないかと思う本である。